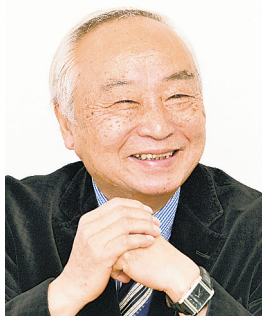


論

説

「障害者に危険な行為はさせない。当然スポーツもやらないのが常識」「日本の選手はあちこちに頼んで集め、やつつけ訓練で間に合わせた」

そんな時代だったから「欧米の選手がりハビリティションのおかげで復帰し、楽しそうに走り、泳ぎ、車いすでボールを追う姿に驚いた」。丸山一郎さんは



宮武 剛

パラリンピック

慶応大生で通訳ボランティアを務めた1964年の東京パラリンピックの思い出を時々語ってくれた。筆者と埼玉県立大学で同僚になった頃のこと。

美智子妃殿下(当時)が観戦されることを知って、海外的女子選手は「美容院で

初めて肌身で知った。

最も衝撃だったのは、欧

米の選手の大半は仕事をもち経済的にも社会的にも自立していたこと。会計士、弁護士、商社マンもいた。

それに比べ日本選手53人のうち職業を持つのは、印刷、時計修理、材木業など5人

工学部を卒業後、丸山さ

の主張や活動は昔話ではな

い。98年の長野パラリンピックを節目に障害者スポーツは福祉領域から脱して普及する。だが、障害者がスポーツを楽しみ、生きがいに

できる社会の環境・条件は確立したとは言えない。

その理念に捧げた人生

髪を整えたい」と言い始めた。丸山さんは新宿の美容院を初めて訪ね、車いすの客を受け入れてもらった。

障害者もおしゃれがしたい、その当たり前前の願いを

のみ。大半は労災病院や福祉施設から直行し、また戻っていった。

「欧米の選手は恋愛や結婚、仕事や家庭を語る。日本の選手は病気やケガと療

みやたけ・ごう NPO法人福祉フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院理事長

養の辛さを訴え、就職も結婚もできないことを嘆く。通訳としてあまりの落差に戸惑った」

中村さんは57歳、丸山さんは65歳で早世したが、そ

全体の半数程度に止まる。18年には法務省、国税庁等の中央省庁27機関での雇用の水増しが発覚した。57年ぶりに開催中の東京パラリンピックも、華やかな祭典と目を見張る競技の根底にある社会の在り方を語り合う機会にしたい。

(本紙論説委員)